命に対してやばい国やね。
原発事故も基地問題も、障がい者の問題も。

戦争法が「成立」した前から気になっていた辺野古の基地問題。カンジョンの人たちとも長い交流があるそうで、日本人であるならカンジョンと同時に辺野古など沖縄の基地問題にも関わるべきではないかと考えていた。そして関西での戦争法や脱原発のデモや集まりの情報を見ているうちに、この川口真由美さんのことが気になり出した。３人の子どもを抱えたお母さんで障がい者の作業所の仕事をしながら毎月辺野古に通い、また連日のように街頭で歌ったり集会に出てるという。どこからそんなエネルギーがわいてくるのかと不思議に思い、お話をきかせてもらうことにした。（あ）

毎月、辺野古の座り込みに通い
音楽の力を信じる京都の歌姫

川口 真由美 さん

→ホテヴィラで

── 京都生まれの京都育ちだそうですね。子供の頃はどんな子でした？

川口●　伏見生まれでいまは宇治に住んでいて、ずっと京都です。団地育ちなんですけど、団地が盛んな頃で、公園に水が豊かで木がいっぱいあって、そこが大自然と思うくらいの場所でしたね。父と母がうまくいかず、父親は日曜日だけ帰ってくるという暮らしをしてたんで、お母さんを支える子どもでした。弟がいて。だからそういう冷静なところを持ちながら、腕白というか子どもっぽくもしながらでしたね。

沖縄に行くと、子ども達がとってもかわいいんですよ。京都の子どもとちがって。そこで私はもう一回子どもに戻ってるようなかんじがあります。そしてこういう子どもがいっぱい増えて欲しいなと思うし、自分もこんなふうに育ちたかったなと見てる自分があります。

── 今やってる活動は辺野古のことが中心なんですか？

川口●　そうですね。原発のこともあるけど、辺野古のことにもうちょっと集中したほうがいいかなと思って、でも京都の基地（＊京丹後・経ヶ岬の米軍Ｘバンドレーダー基地）もあるし、その二つですね。そうしながら関電前（＊脱原発の街頭行動）には行くというかんじです。

── 毎月沖縄に通ってるそうですが、いつ頃から？

川口●　４年前まではふつうに沖縄に遊びに行ってたんですよね。障がい者の運動にかかわってきましたが、沖縄の問題とつながってると思ってなかったんです。そんな中で、友達の講演会で高江の24時間座り込みのことを知ったんです。それで高江に行って見たら、こんなことが沖縄で起きているんや、今まで何をしてきたんかなと思ったんです。で、そのとき辺野古のテントにも行きましたし、障がいの運動もやりながら沖縄のことを知ってもらう活動に切り替えていったんです。

その頃はまだゲート前もあんなになってなかったし、４ヶ月に１回くらい行ってたかな。集団的自衛権の行使容認が2014年７月１日でしょ。それといっしょに進んでいったかんじで、その８月から毎月行ってます。辺野古の新基地建設を進めて、軍事力を拡大するんでしょ。これはもうぜったい戦争になるんやろうなと思ってたんです。やっぱりというかんじですよね。沖縄から進んでいくなと。

── 地元の京都でも丹後半島の経ヶ岬に米軍のレーダー基地ができましたね。

川口●　更地のところから見てましたけど、あれよあれよというかんじで進みました。もう行く毎にいろんなものが変わってるし、広がってきたし、ちょっと離れた島津というところにも軍属が住む立派な建物ができて、もう被災地ほったらかしてこんなもんできるのかーていうかんじで、突貫工事やけど立派にできているし。

辺野古とちがって経ヶ岬のレーダーは私はとても苦手です。そこにいてたらレーダーがけっこうしんどくて。大きな電子レンジの中にいるような状態なんですって。だから発がん性とか体に絶対悪くて健康被害も起こっているし、その中で子ども達も育っていくわけでしょ。人権蹂躙状態というか、障がい者の問題もずーっとそれできているけど、障がいが無い人にもそうなんやでということをもっと知って欲しい。その上雪深いやろうし、私寒いのが苦手なんですよ。(笑)沖縄の気候は体が楽ですから好きで、私には経ヶ岬は座り込みできひんやろなと思いながら見てるんです。

去年の12月にレーダーが搬入されたんですよ。それが入る時にはゲート前でみなさん座り込みされてたし、その動画も残ってます。そこだけ見たら辺野古の映像みたいなんですが。でもそのこともほとんど知らされなくて、心が痛いです。

カンジョンの人も経ヶ岬に来てはったんですよ。更地の時からね。で、基地問題がどんな大変なのかと。そんなふうにチェジュ島の人が京都に来て、でも京都の人がぜんぜん知らんわけでしょ。それめっちゃ不思議やなと思って。

次頁に続く

1頁から続く

→京都の街頭デモでトラメガを持つ真由美さん

で、私ぜったいにカンジョンに行きますと言うてたんです。経ヶ岬と辺野古とカンジョンとの三角関係というか。それでちょうど約束を果たして行けたんですけど、10月にカンジョンに行ってきたんです。ちょっと衝撃でしたね。どんだけひどいんやろ。ゲート前でミサされるやないですか。朝７時にゲート前に行って、そのあと座り込みをして、11時くらいからミサが始まって、そこで歌われた歌が、「クロンビ、サランヘ〜」私、あの歌がどんなアーチストの歌よりも忘れられないんですよ。

―― その時の動画見ましたけど、雨風が強くて辛そうな顔してましたね。

川口●　そうそう、すっごい風で（笑）、でもあそこ見たら、辺野古の先を見たようなかんじで、タイムスリップしたみたいなかんじでした。

―― カンジョンでも住民との約束をことごとく破ってウソついて強引に工事を進めてきて、この12月には完成ということですからね。

川口●　経ヶ岬でもバスでホテルから通うと言ってたんですけど、バスは通ってるけど空気運んでるんですよ。つまり誰も乗ってないんです。で、軍人たち軍属たちはみんな自分で家借りて自分の車で通ってるんです。それでもう人身事故を含む事故が20件以上も起こっていて、地位協定全国展開中ってかんじですね。

■障がい者との関わり

―― もう10年くらい障がい者の作業所の仕事をやってるそうですが、それはなにかきっかけがあって？

川口●　それはそういう仕事についてやりはじめたからなんですけど、面接に受かったものの、最初はいややったんですよ。ようわからなくて、知らなくて。でもそれまでにも南アフリカの飢餓状態の人たちに服を送ったり、生まれながらの差別問題とか、そういうのに興味もって自分でこちょこちょ個人的に見ながらやっていたんですけど、障がい者問題はさいしょ仕事上やらざるをえなかったんです。

　そしたら自分もその時離婚して、子供抱えて一人でしたから、貧困の問題も人権問題というか女性の仕事の問題もみんな同じ問題に苦しんでるんやなと思って。それと障がい者の自由のなさとかにつながったんです。障がい児がいるお母さんたちってとっても大変なんです。身動きとれないし。

　その頃ちょうど政府が障がい者自立支援法というのを出してきて、それだとトイレに行くにもご飯食べさせてもらうのもお金を払わなあかんのですよ。でも人間の生きる権利って一番大事なことじゃないですか。それをお金を払って、自立という名のいじめ状態なんですが、それに対して違憲訴訟が起こったんです。重度の障がい者の人たちとかが原告団になって、もうほんとに大変な生活をしながら訴訟を起こすと。私は福祉の仕事を選んでしまったけど、自分の暮らしもてんてこ舞いやったんですよ。でも自分も貧乏やけど、この人らもとっても大変やと思って、政府ってこんなひどいことしてなんやろと思って。それで違憲訴訟に対して国が和解してくれということで、２年間かけてその法律をつくりあげようということになって。民主党政権の鳩山首相の時やったんですけど、でもなんかごちゃごちゃとなっていったんです。自立支援法をなくしましょうと！当時の厚生労働大臣がいったものの、変化はなく、内閣府扱いの法律は、とても高い位置にあるはずなのに、中身があまり変わらないないようで……こんな形で踏みにじられるのか、と、この国の政治にたいして不信感ばかり抱いていました。この決定を受けたとき、私、政府ってむっちゃいいかげんと思って、裁判とかもみんなおかしいと思ってきて、そこにちょうど原発事故が起きたんです。それで障がい者の方は今まで動いてきたものまで事故後は動かなくなってきて、とにかく先に被災地というかんじやったんで、私らもいろんな支援とかしながらいたんですけど、そんな状態になっていったんです。

　その頃に辺野古のことは知ってたんかな。もう何十年もずっと狙われてるって。で、安倍政権になってどんと進むところも見てきたし。けっきょく被災地でも民間の人が立ち上がらざるをえないでしょ。障害者運動も、押しては、戻され戻されては押しという感じですが、でもこの戦争法の場合は押し寄せて勝つとかじゃなくて、もう戦争法を通されたらそのまま命に関わっていくことでしょ。だからこの法案が出た時に、この闘いは負けられへんと思ったけど、やっぱりこういうふうに通すんやなーと思った。今もどうしたらいいかわからない。

　障がい者の問題もたくさん親子殺しが起こったんです。作業所の給料て平均8000えんぐらいだったんですよね、当時。利用するのにかかるお金が多いところで３万なんぼ。もうこの子がいたらうちは破産すると言うので、全国的に親子殺し、心中が起こったんです。そういう命のことについてテレビでもぜんぜん言わないし、あの命への軽視は戦争法につながってると思うんです。やっぱりどんな命も大切というところで勝ち続けなかったら、そら戦争になるよなって思う。世界を見てもそう思います。今は原点にもどってなんで争うのかなって思う。そういう人間の争いがあるかぎり、戦争法とかレーダー基地とか全部通るわなって、改めて思います。

―― 今は作業所の代表やってるんですか？

川口●　前の作業所はやめて、今は借金して「あろあろ」という作業所を立ち上げたんですよ。2014年の４月に。障がい者も仕事仕事というふうになってきてね、政府の狙いは納税者を増やすことですね。そんな生産性重視の社会の中で、作業所の役割をもう一度見直したいと思ったのと、作業ができにくいひとの受け皿も必要であるし、、もっと個性をいかして社会の中に在ることはできる、と思いました

――「あろあろ」ってどういう意味ですか？

川口●　ハイビスカスっていう意味なんですって。ハワイ語で。それと「あろ」というのは古典ラテン語で「共に生きる」という意味なんです。わたしラテンが大好きなんですよ。そういうノリノリのんが。（笑）

―― それはわかるような気が、、。障がい者ってどんな障がいの人が来てるんですか？

川口●　だいたい知的障がいですね。

―― どんな作業をしてるんですか？

川口●　まあ内職もあるし、歌と踊りも。

　あの、私、江州音頭の音頭とりなんですよ。滋賀県の踊りです。それは４年前くらいかな、師匠のところにお願いして。これって口伝なんですよ。耳から聞いて、わたし憶えが悪いから２年間かけて１曲うたうかんじなんですけど、そういうのを障がい者の人といっしょに短編みたいにして、デイサービスなんかで高齢者の前でやったり、お祭りに呼ばれたり。けっこうじいちゃんばあちゃん好きやから。まあ私が歌って太鼓叩いたりして、みんなは踊るだけですけど。賑やかーなかんじやね。

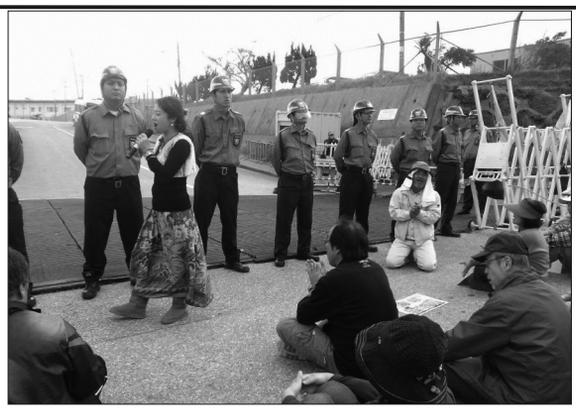
―― そういうのが求められる場ってけっこうありそうですね。

■音楽って神様がいると思う

川口●　やっぱり人間て音楽を忘れたらあかんし、基本は太鼓と踊りやと思うんですよ。そこに歌がついて、笛がなって、ワクワク楽しいき

→辺野古のゲート前で歌う

もちになっていく、と。これは世界どこでもそうやと思うし。日本人って踊ったり歌ったりをはずかしがるところがあるでしょ。私はそれを作業所でもいっかい復活させたいと思ってるんです。そこで恋愛が起こったり、昔は遊びがなかったからそういう何かわき上がるようなものを日本人てしなさすぎると思って。



―― 原発のことでも何でも、理詰めで訴えることももちろん必要だけど、歌で伝えることですっと胸に入って人を動かすことがありますよね。歌の力ってすごいなと思います。

川口●　すごいですよね。さっき言った「ガンジョン　ピョンハ　クロンビや　サランヘー」、ほんまにクロンビを大切にしていた。共に生きていたことがわかる。爆破されて基地ができたこと、悲しくて仕方ないです。あれこそ歌やって思う、ほかの言葉はわからへんけど、そこはが一っと入ってくるし、やっぱり歌っていうのは肉声。それは動物もね、いろんなときに声を変えるじゃないですか。それといっしょで日本人でも米軍でも、警視庁から来ているあの人達でも通じるような声って何かあるはずやと思って、それをいま研究してるんです。自分で勝手にですよ。上手に、美しく、力強く、人間の心・魂を歌うなにかあるはずやと思って。歌も闘いですよね。ちゃらちゃら～と歌ってるようには見せて、なにか伝えたいと思ってやってるんです。辺野古に行ってからよけいにそう思ってます。私の勝手な思いですけど。

―― 歌や人間の声って空気を振動させて伝わっていくものだから、その振動というか波動に思いを乗せることってできそうですね。機動隊員にも歌で伝えた方が彼らの胸に届くような気がします。

川口●　そうそう、辺野古で「♪人に生まれ、いのちを守る～♪」て歌ってると、ALSOK（＊民間警備会社で雇われて基地周辺の警備をしている）の人もうんうんうんて聞いてくれてはります。（笑）　ALSOKはねえ、ちょっと仲間っぽいかんじになってくるっていうか、また警察とちがうんですよね。ずーっとそこに立ってるし、辺野古の状況を一番知ってるはずです。「おはよー」「おはようございます」ってかんじやし。警察でも「あんたらの言うことわかる」って泣きながら排除してる人もいると聞きますしね。だから、わかってる人はわかってるって思うんやけどね。

―― ところでいつごろから歌ったり音楽やってたんですか？

川口●　ちゃんとやるのは大人になってからです。ハウスバンドのボーカルやったり。でも中学生のころ近くの民謡の先生に民謡やりなさいと言われたりしました。、喉でハモらしてるんですよ。自分で調節して。それはたぶん民謡の人の歌い方みたいなんです。中学生の時は体も鍛えてたからもっとすんごい声が出てて。それからエレクトーンをやってたんですけどあれ持ち運べへんでしょ。それでギターを独学で勉強して。鍵盤が同じやからピアニカもやってたり。ただ歌と同時にはできないので、アコーディオンがいいのかなと今思ってます。

それと盆踊りとか踊りも好きなんですよ。高校生の時に創作ダンスていうのに出会って、生きるということをどう表現して踊るかとか、死ぬというのはどういうことなんかとか、そういうのを考えて踊ったりするのが好きやったんです。で、あのとき楽しかったなと思ってるところに、聴覚障がい者のダンスに出会ったんです。手話のダンスなんですけどサインダンスと言って、手話だけじゃなくて体全体、指先とか表情も使って踊るんです。それを即興でもやるし、ある程度これでやってと頼まれたものをつくって踊ることもあります。6、7年前かな。それを見た時、これできるわ、前のやつと一緒やんて思ったんです。ほんまは歌うよりかこれが一番好き。いま辺野古では踊りながら歌ってるかんじです。なにか伝えるというのが好きなんでしょうね。自分自身を解放されたいんです。そこに表現をまぜるというか。なんか動物とかに習ってるかんじです。鳥のなきかたとか、声質とか聞こうとするし。犬の声も今日はなきかたちゃうから、言ってることこれかなと思うとだいたいあたってるし。（笑）言葉じゃなく伝えようとしている声質というか、求愛やったら求愛行動やし、ケンカやったらケンカやろし、なにか言葉じゃなく伝えられるっていうのをかんじてます。

―― 京都の地元ではどんな音楽活動を？

川口●　今はおもちゃ楽団てやってて、それは関電前で友達になった人たちからできあがったバンドで、「オラシャヤーン」（＊フランスのデモで歌われるようになった歌。「あきらめないぞ」という意味）とか歌ってます。おもちゃみたいな楽器でもいいからガチャガチャといろんな人が入ってきてやろうって、いろんなところでやってます。集会なんかでメンバーがそろわなかったら一人でギター弾いて歌うこともあるし。障がい者の作業所の方は明るい明るいって書いて明明（めいめい）楽団ていう、私たちが世の中にもっと主張して明るくしましょうっていう意味でつけたんです。楽団てつけたら何でもありだと思って。

秘密保護法とか障がい者のことでも街頭で署名集めとかしてて、さいしょなんでこんなのやってもしょうがないと思ってたんですけど、それが今につながってますね。演説だけしてても素通りですけど、歌があるときは署名数が全然ちがいます。

歌との出会いって神がかってることがありますね。音楽って神様がいると思うんですよ。で、常に追い続けてもとれなくて、いっつも追い続けるっていうかんじで。だから私どんな音響でもやるし。けっこうミュージシャンてめんどくさくて、マイクないとか音悪いとか言う人がいるけど、私はトラメガ（＊デモの時に使う拡声器）でもなんでも、声の出し方でマイクなくても何とかなるようにできるしね。

―― 辺野古でもいつも歌ってますね。

川口●　もともと辺野古には歌いに行ったわけじゃなくただ座り込みに行ってたんです。一座り込み人としてね。朝早く行ってテントの設営からずーっとそこにいて、テント片付けて、夜中の行動にうつり、そんなんです。またトラックがいつ来るかわからんからはりついて、そのまま飛行機の時間が来たら帰るという。ずーっとそれやってきて、それやから沖縄の人も、この人真剣やと思ってくれたんですよね。ちょっと行って歌いに来ましたでは信用されないと思う。私ほんまに辺野古止めたいんですよ。いろんな障がい者のお母ちゃんの思いとか全部そこにあるような気がして。辺野古のこと糧にしてます。ただ今はこんなに難しいのかって思って、どんなしたらいいんかと思って落ち込んでます。でも辺野古っていう言葉はけっこう浸透してきたと思うしね。自分もなにか一役かってるかもしれんとは思うし。だから米軍に対しても、殴り込むように歌ってんな。もちろんすごく平和的に空気を変えようとしてる。言葉で言うよりかは歌う方が好きなんです。

■辺野古の座り込み

川口●　私、たぶん道で住めるんですよ。道とかどこででも。辺野古もほとんど車かテント住まいだし、そういうのが全然気にならなくて、今年の正月明けに行った時は３日間だけだったんですけど、風呂にも入らんと座り込みをしていたら山城博治さん（＊沖縄平和運動センター議長で、沖縄の平和運動の象徴的存在）に顔くらい洗いなさいとかって言われて（笑）。だって

４頁に続く

４時ころにトラックが入ってくることもあるし、常にそのへんにいとかないと、辺野古に行ってる意味ないですよね。

―― トラックが入ってくるのは朝早くだけじゃないんですか？

川口●　今は昼に人が多いからほとんど入らないんですけど、最初の時は何時でも入ってたんですよ。それが島ぐるみ会議なんかができてバスがきっちり来るでしょう。するとまあ９時から４時まではほとんど入らないんです。この新聞の出るときはどうなっているかはわかりませんが、運動がだんだんできてきたんですよ。今はトラックは朝の６時から８時までの時間に入ってくるかんじです。でも昨日はその時間に700人いたんですって。だから入らなかったけども、11時前にふっとみんなが帰った時にわっと入っていったんです。だからよく見てる。それにこないだも夜中も歌ってたんですけど、２時ころになって、朝は６時からやからもう寝ようかといったところに３時ころに入ってきたり。なーんか小学生の喧嘩みたいなかんじでバカにしてますよね！（怒）堂々と真っ向勝負できない政府は運動に押し負けているくせにね！友達やったら「あんたな」って、「ちょっとちゃんとしいな」って言うかんじやね。

　自分も腹がたったりいらっとすることあるし、そういうのんもどうなんかなと思いながら。ゲート前にいる時なんか、が一っとやられたらやり返したくなることがあるんですよ。もっときつう言うたろかとか。けどその怒りでやってしもうたらあかんなと思って。

　いつまでこんな非暴力でやっても、絶対トラック入るやんて思って見てきたんです。けど、こないだ座り込み500日目の時に1200人集まったんですよね。あのとき機動隊は出てこれなかったんです。え、これ毎日やったらって。でも700人でも出れなかったし、とにかく毎日500人いればこの国策は止めれるんやって、こないだ行ってわかったんです。それには拡散するしかないから、いろんなSNSとか使ってるんですけど。

―― そういうのを見て沖縄の人だけでなく全国から来てる人たちがいるんですよね。

川口●　そうです。山梨とか、北海道もいはったし、県外の人がけっこういはりましたね。なんか500日目に合わせて行ってはったんかな。あと水曜日が議員行動の日なんで、国会議員さんも県会議員さんも市会議員さんもいるという状態で、でも国会議員も排除されてごぼう抜きにあってましたから。赤嶺さんとか糸数慶子さんとかね。こんなことするかーって思うけどね。翁長さんやったらどうなんかなと思うけど。（笑）

米沢さんていう広島で被ばくされた81か82才の方がいるんですけど、その人があと10年生きてくれるとしたら、その間に辺野古をあきらめさせることをできるかもわからんと。それを見せたいと思ってます。被ばくして、お母ちゃんは死んでしもて、その時自分もお母ちゃんが死んだことがわからんくらい朦朧としてたっていうその人に辺野古の基地は無くなったよというのを見せたい。

―― 翁長知事の奥さんがいざとなったら座り込むって言ってましたね。

川口●　万策つきたら座り込むと。そんなん言わんと来てーさ！！と、心の中で思ってますけど。いいやん！来たら！って。忙しくても来てほしい！と私は個人的に思っています。

―― 県外から行くとなると飛行機だろうし、ホテル代とか県内での移動とかにけっこうお金かかるでしょうね。

川口●　那覇空港から辺野古までは高速で１時間ちょいはかかりますから、そのバス代から、おりたところからタクシーとか食費とか宿泊代とかけっこうかかると思いますね。

　私の場合はむこうの人が知り合いですから大阪から飛行機に乗るだけで、ありがたいことに誰かに迎えに来てもらえてきています。それに最初からいるっていうのもあって、中のミーティングにまで入れてくれてるくらいでね。聞いてるだけですけど。みんな友達だから。

―― いまは警視庁の機動隊が東京から派遣されてきてるみたいですが、沖縄県警の警察官とはまたちがうでしょうね。

川口●　警視庁はきついですね。「お前、逮捕するからな！」て言うんですよ。「公務執行妨害だ。お前！お前！」って指さして。

―― 警察官もずっといると人情がわくから交替させてるんでしょうね。

川口●　そうやね。だからALSOKも鹿児島までの人しかいないみたいです。沖縄の人は情がわくというか身内やから。で、どこ行くか言われずに連れてこられてるみたい。

　原発の作業員もいっしょやね。釜が崎のおっちゃんたちもひどいそうやし、前からそうなんやけど、命に対してやばい国やね。原発事故も基地問題も、障がい者の問題もずーっとそうやね。いつになったらこの人たちはヨーロッパみたいに人として認められるんやろなと思う。

　米軍基地は撤去できる！と願ってる。行動して、がんばって撤去の道へ力になりたいと思う。

―― 暖かいのが好きだったら、沖縄はよさそうですね。でも夏は暑いでしょ？

川口●　いえ夏の暑さはぜんぜん大丈夫なんです。真っ黒になってもいいなと思うくらい。よく海に潜ってます。わたし肺活量が多くてけっこう深くまで潜れて、何にもつけなくて潜るんですよ。こないだ１回、魚みたいになりたくて素っ裸で泳いだんです。（笑）ほんならぜんぜんちゃいますよ。やっぱりなんか着てると抵抗がありますよね。あれは解放されたなー。

―― 魚が仲間だと思って寄ってくるんでしょうね。

川口●　人けのないところでやらんとね。沖縄の人もそんなことしないって言われたから。（笑）

　沖縄とこんなに縁ができるとはおもってなかったです。観光で行ってはいたけど、こんなに通うことになるとはまったく思ってもみなかった。基地問題でよけい好きになったっていうかんじです。それに子ども達がかわいい。

　今、下の子は沖縄に住んでるんです。三線を弾いたりしていましたから、文化に触れることを多くの願にして、沖縄でがんばっています。中学生にあがるときに沖縄の友達にあずけることにして引っ越したんです。だから私、そこに通ってるのもあるんです。だけどね、ほとんどこの子に会えないんですよ。早朝行動に出るには４時50分くらいに起きて５時に出ると。で、子供が部活から帰ってくるのが７時半くらいで、ご飯たべて寝るのが９時半くらい。だから１週間いても１時間半くらいを５日間くらい会えるだけで。子供自体も友達が好きみたいで、私のことあんまり気にしてないから。

■貧しさが怖くないからかも

川口●　私、母子家庭で貧乏やってきたじゃないですか。最終的にはテント暮らしというか路上生活者になるかなと思ってました。その時ほんとお金なくて、水商売もしてました。作業所の仕事と水商売でなんとか成り立ってたけど、体もかなり酷使してしんどかったです。７年間、週に３回 祇園で働いてたんです。ぼろぼろのアパートに住んで、誰も家にいないんで、そこに

中学からの同級生のママ友達が泊まりに来てくれて、まだ私の３番目の子どもが小さかったので私のしぼった母乳を飲ませてくれたり、そんなんでした。

洗濯機も外にあるようなほんまに貧乏なアパートやったけど、そこではアジアっていうかんじでみんなで助け合って、子供をお風呂に入れたりとかね。電話かけてると上の階でしゃべってはるのが聞こえてくるくらいなんですよ。みんなでご飯食べたりとか。（笑）貧しくてもそういう方が好きやね。やっぱり人間て人と近い方が幸せですよ。人のぬくもりが必要やね。日本はそこをはずしてだんだん来てるからね。

私、何とか生き延びてきたわー。日本で貧困でこんな大変やと思ってなかったな。親子で死ぬ人多いでしょ。人に頼れなかったらね。私はたまたま友達が多いから来てくれたけど。でも助けてと言う人もいなかったら、どうしたらいいかわからんよね。今も餓死する人いるでしょ。私は路上生活してでも生きたいなー。で、作業所で資格をとれたからよかったけど。このままじゃあかんと思ったから、その日を境にがんばって働いたんやけど、そんなんもなかったらねえ。収入も少ないし子供も３人いて、家賃を払えへんかったら。そんな中でやってきましたね。これは生きててラッキーやなー。

── それはやっぱり真由美さんに生命力があるからでしょうね。苦しくなって、すぐあきらめて川に飛び込むような人もいるだろうけど、路上生活してでも生きようと思ってたわけでしょう。

川口●　そうやろか。私、人にされる側になるのはいやなんですよ。人に迷惑かけずに自分で何とか生活できたらと思う方なんで、路上生活だろうが、テントだろうが、どっからでも化粧して出て行くでしょうね。寒くなかったら、どこででも寝れます。

── 安倍政権になってからよけい貧困者が増えて格差社会が広がってきてますね。

川口●　格差社会ってだいぶ問題ですよね。安倍政権がやってることって、その渦の中にいたらわからないでしょ。私がそこから抜けて来たんは、なにかに集中する性格やから、なにかおかしいなと思って違憲訴訟とか憲法のこととかの学習会に行ったりしたからつなげていったんですけど。そんな余裕もなかったら、なんなんこれ？って反対派にまわってるかもしれないです。

そんないろんな大変なことがある中で、よく自分の生活を社会問題やと結びつけられたねって言われますね。

いっつも家計はマイナスになってから給料が入り、またマイナスになってという暮らしやったんですけど、でも貧しさが怖くないからかもしれへん。

それに水商売やってる中にも出会いがあって、私が作業所で支援員として働いている時に、社会の中で充分自分を表現してるみたいに言われたときに、なんか納得したり。お金のある人はお金使ったらいいし、あんたはお金ないから気持ち使ったらそれで充分やんて言われたんです。（笑）だから水商売といってもけっこう勉強してたかんじですね。祇園でもちゃらけてるところとちがってしんみりしゃべりに来るようなところやったんで。

■ドキュメンタリー映画を撮影中

── 映画はいつころ完成予定ですか？

川口●　いま撮ってて、たぶん春に出すと思います。夏に選挙があるじゃないですか。そこに向かって、安倍に入れるなというようなメッセージとか、Ｘバンドレーダーのことも全然知られてないから伝えたいと。監督には前から映画のこと言われてていややと断ってたんですが、もうこうなったらいややけどやりますということで始まったんです。けど、やるからには、ということで、がんばっています。辺野古のこともちろんでてきます。

── カンジョンにも撮りに行ったんですか？

川口●　そうですそうです。基地問題が出てきて、砂川闘争の 60 周年の集会に行ったり、そのあと横田基地も出てきます。オスプレイもいたし、あんなに大きいんですね。ギャラクシーなんちゃらっていう輸送機もあって、そこに戦車やオスプレイも乗るんですって。

── あとはどんなところに行って撮影するんですか？

川口●　あと、ナヌムの家というのもでていますが、どうなるかわかりません。まだ未定です。そして最後には与那国島に行くみたいですけど、まあ予定は未定かな。与那国には与那国馬がいるんですが、自衛隊のトラックの音に驚いてたくさん死んでるんですって。それには私も心を痛めていて、ほんとは牛とか馬と暮らしたいんですよ。（笑）映画はその与那国の話で終わるみたいです。

→映画のポスター

── タイトルが「炎の歌姫」ですってね。

川口●　うーん、監督が押し切ってたから。私はもう一切口出ししてないけど、それだけはいややと。（笑）歌姫って若い人のこと言うんやろからやめてほしいって思ったんですけどねー。私は「辺野古なんとか闘争」とかそういうのにしてほしかったんやけど、それでは映画館が嫌がるからあかんて。（笑）歌姫、恥ずかしいわー。まだ、映画の名前については、話し合いもしています。

── ところで畑もやってるそうですね。

川口●　隣の町の城陽市で無農薬の野菜を育ててるおっちゃんおばちゃんたちがいるんですが、野菜分けてもらったり、作業所でなんちゃってお手伝いをして迷惑をかけに行っているだけです。(笑)そこは以前関わりがあって、別の高齢者の方なんですが、高速道路の予定地にされているところを、みんなで畑をして守っておられたのを、友人とともに手伝ったりしていました。私たちの活動はワンダフルだって言ってワンダフル農園て名付けて、90 才のおっちゃんの畝づくりを手伝ったりして、そうやって高速道路を作らせないと。行政は計画をけっきょくあきらめて迂回して別の場所に高速道路ができたので、守られたんです。

無農薬のおっちゃんおばちゃんの畑には、春は週に１回行ったりしてます。そこの砂は細かくておいしいお芋ができるんですって。それで無農薬でつくるというのでいっしょに手伝っているんです。その畑のそばの山で椎茸の栽培なんかもやってるので、山仕事もやってます。私、子供のころガールスカウトをずっとやってたんです。

── だからいろんなことができるんですね。

川口●　そうそう、テントたてたりトイレつくったり、そういうの大好きなんです。

自分も子供産んだりとか自然の一部やと思うし、自然がすごく好きなんです。今アイヌの人や沖縄の人に会ったりするとなにか自然なかんじがして、おばあを大事にしたりとか太陽や大地が大事って、そういう土着的なところが好きなんです。いまだに藁を編んだ魔除けみたいなのがあったりとか、そういうのが残ってますね。

それに沖縄は先祖崇拝がすごいです。お盆みたいな清明（しーみー）祭ってあって、その時になったら座り込みの人もめっちゃ少ないです。そっちが優先されて。（笑）●